
A Flower Of Eden/休載中

風音 柚樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Flower Of Eden / 休載中

【Nコード】

N3268C

【作者名】

風音 柚樹

【あらすじ】

科学者・修と共に暮らす、記憶を失った少女・エヴァ。彼等は平和で、（エヴァからの一方的に近い）愛に溢れた生活を送っていたが、ある日、その平和が崩れ去って。エヴァが口にした「禁断の知恵の実」とは？現世界版アダムとイヴ、ここに始まる。

prologue + アダムとイヴ（前書き）

この作品には、” アダムとイヴ ” の話を脚色したものが文中に含まれます。

宗教の事に関しては触れておりませんが、不快に感じる方もいらっしゃるかと思います。

しかし、この作品に必要な要素だとの考えの下行っておりますので、ご了承ください。

prologue + アダムとイヴ

神は、たった一人で、存在しました。広い広い天上の世界に、たった一人、独りきり。いくら永遠の命を持つていても、いくら物を創りだす事が出来る力があっても、いくらたくさん^なの果実が生る木々に囲まれて「エデンの楽園」で暮らしていても、つまらないのです。自分しかないから、何も変わらない。自分で「いつもと違う生き方」を試みても、気付けばそれが「いつもの生き方」になってしまう。恐ろしく退屈な日々^に、永遠の命を持て余すだけの生活でした。

そんなある日、ふと思いついた事がありました。自分の仲間を、作ればいい。

どうせする事が無くて暇な神は、すぐに、「創造力」を使いました。自分の力を与えることは出来ませんでした^が、姿は自分に似せて。これが最初に生を受けた人間で、男でした。この成功に神は大変喜んで、彼に、「アダム」という名を与えました。そしてアダムには、素敵な実をつける木々がたくさん植えられている「果樹園」の管理を任せました。

神は、独りではなくなりました。広い広い天上の世界に、アダムと二人、良き友と二人で、楽しく暮らします。

しかしある時、アダムは言います。

「神よ、私は毎日あなたと過ごす事が出来て、とても楽しい。だが一つだけ、お願いしたい事があるのです」

それは、果樹園の管理は一人でやるには少々大変過ぎるので、どうにか出来ないか、という事でした。神は今まで一人で管理をしていたのですが、やはり神と人間は違うのです。神ならば簡単に出来る事でも、アダムには難しい事でした。

「よし、わかった。ではこうしよう」

神はアダムを眠らせて、その間に彼の肋骨ろっこつを一本、切り取りました。そしてそれを基に、二人目の人間を創りました。アダムと同じように創って、外見をほんの少し変えて　出来上がったのは、人類最初の女性でした。

「アダム」

間もなく目を覚ましたアダムに、神は告げました。

「紹介しよう。彼女には今日から、君の仕事を手伝ってもらう事にした」

アダムは神の隣に立つ美しい女性を見て、目をぱちくり。

「彼女を、イヴと名付けよう」

それから、広い広い天井の世界で、神とアダムとイヴの三人での、楽しい楽しい生活が始まりました。

アダムとイヴは、果樹園に生っている実はどれでも食べてよいと言われました。

「ただし、」

神はこうも言いました。

「果樹園の真ん中に、他の木から離れて立つ二本の木があるだろう？　あの木々になる実だけは、決して食べてはいけない。もしあれを食べてしまったら、死んでしまうからね」

実はその木々の片方は生命の木、片方は知恵の木で、実みを食べれば死んでしまうというのは、全くの嘘だったのです。

けれど純粋な二人は、この先もずっとこんな風に暮らしていきたいと心の底から願っていましたし、神を疑う心なんてこれっぽっちも持っていないから、素直にこくんと頷うなずきました。

さて、神は孤独を知っていました。独りぼっちで寂しくいる事がどんなにやりきれない事かわかっていました　だって、だからアダムを作ったのですから。

でもアダムもイヴも、どんなに姿は同じようでも、自分とは全く

違う存在。もしその事に気付けば、自分の事なんて放っておいて、二人で何処かへ行ってしまうかも知れません。そしてきつと知恵の実を食べれば、気が付いてしまうでしょう。だからそれを食べる事を、禁じたのです。

とにかく何日も何日も、長い間、素晴らしい日々は続きました。アダムもイヴも、無邪気に毎日よく笑い、神も退屈する事はありません。

それでもやはり楽しい日々というものは、永遠には続きはしませんでした。

ある日、イヴがアダムと手分けをして果樹園の木々に水をやっておりますと、すぐ傍に蛇が寄ってきました。

「イヴ！ 凄い事を教えてやろうか？」

「何、蛇さん？」

「あんたとアダムは、神に騙されているよ」

「まさか。嘘をおっしゃらないで」

蛇の尾が湿った地面を叩きます。

「嘘なんかじゃないさ。あの、『禁じられた実』の事だよ！」

「まだ私をからかうおつもり？」

イヴは、長くて緩く巻いた金の髪が地にとどくくらいにしゃがみ込んで、蛇に言いました。

「違う、違うさ！ あのうち片方の木の実は、知恵の実だよ！ あつちの木！」

蛇は、ちょうどここから見える例の二本の木のうちの一方を、自分の尾で指し示します。

「どうやら神は、君達に知られたくない秘密があるらしいね。知恵のつく実を食べれば気付いてしまうから、君らに食べさせたがらなかったんだよ！」

「悪い冗談は、およしになって！」

イヴは、蛇をきつと睨みました。すると蛇も腹を立てた様子で言い

ます。

「嘘だと思ふのなら、それでもいいさ！ この先何があっても、知らないぞ！」

それからイヴの目の前の地面を尾でピシリと打って、シューシー言いなから去っていきました。

しかしその日から、蛇の言葉が頭を離れません。本当に、神の言う事は嘘なのかしら？ 知恵がつくというのは、本当？ おいしい実かも知れないわ！

ついにイヴはある日、蛇に教えられた方の木の実に手を伸ばしました。眺めれば、この果樹園の他のどの実よりもつやつやと光って、おいしそうではありませんか。それにこの、甘い香り！ イヴはゴクリと唾を飲み込んで、素敵に熟れたその果実を、恐る恐る一口かじりました。

なんておいしいのでしょうか！

イヴはあっという間に、全て食べ終え、そして様々な事に気付きました。もちろん、神はイヴと「違い」、アダムは「同じ」である事も……。

「アダム！ アダム！」

イヴは慌てて、アダムにも「禁断の実」を食べさせました。

神は二人を、「裏切った罪」として、樂園追放の刑にしました。もう一つの大切な木に生る「生命の実」まで食べられてはいけないと思いましたが、二人の方から神の傍を離れると言われれば、きつともつと苦しいに違いありません。

やがてアダムとイヴは神の創った下界に降り、そこで暮らしました。

神は、またたった一人の存在になりました。広い広い天上の世界に、たった一人、独りきり。前より悪い事に、今はもう、「誰かと

いる事の楽しさ」も知っています。毎日毎日、ただ楽しかった日々を思い出すばかり。

かと言って、また人間を創る気にはなれませんでした。仲良くなってもまた離れてしまうなら、最初からいない方がいい。

prologue + アダムとイヴ（後書き）

現在連載中の別作品の裏で、ちまちまと書いてゆきたいと思います。そっちの方は重過ぎるテーマになりがちなので、こちらでは、まあ、比較的明るく……。

まったりペースで地道に連載していきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3268c/>

A Flower Of Eden/休載中

2010年10月11日03時03分発行